

2009年のルワンダ再訪

小峯茂嗣 ARC 事務局長

今年2009年は、早稲田大学客員講師として同大の海外実習科目「平和構築実習」の現地実習の引率で8名の大学生とルワンダを訪れました。94年のジェノサイドから15年を経たルワンダの近況をご報告いたします。

激変する首都キガリ ルワンダの首都キガリが急速に変貌しています。きれいな高層ビルが増え、2年前に完成した Union Trade Center というショッピングモールには NAKMAT という24時間営業のスーパー（ケニアの企業）が入っています。他にもここには Bourbon Café というコーヒーショップがあるのですが、



ルワンダの若手起業家によってはじめられたそうです。市内では携帯電話、インターネットカフェも普及し、店で売ら

れている商品の種類も増えてきました。これまではカラフルなパッケージの商品は輸入品でしたが、最近では国産ながらかわいいデザインのパッケージのものも出始めてきました。一方で物価、ガソリン価格は上昇し、庶民には暮らしづらい状況のようです。路上で野菜などを売る人の数は目に見えて減ってきたようです。キガリ市が禁止したからですが、それでも生活のために警察の目を気にしながら路上販売を続けている人もい

ないわけではありません。美しく便利になっていく一方で、貧困層が暮



らす地区は土壁にトタン屋根の家が軒を連ねています。急激な変貌の中、貧富のコントラストを感じます。

変わらない地方の村落 ARC の現地カウンターパート団体の ARTCF（協働で戦争寡婦たちの洋裁学校とバナナ工芸品世作訓練所事業をやってきた）のコーディネーターであるジョセフィン・ムカヒギロさんの同行で、キガリから車で1時間半ほどの村落ビチュンビ（Bicumbi）に行きました。ARTCFはこの村の女性たちのグループ（アソシエーション Association と呼ばれます）を通して、家畜のマイクロクレジットなどによって生活状況改善に努めています。これは ARTCF がアソシエーションのメンバー

数名に牝ヤギを与え、隣人の飼うヤギと交配させて（お金を払う）子どもが生まれたらそれは他のメンバーにあげる、その次に降に生まれた子ヤギは自分のものとして飼うことができるというものです。10年前にこのプログラムの支援を受けた家を訪問したところ、その女性は育てて大きくなった



ヤギを売ったお金でニワトリを飼って卵や鶏肉を売ることができるようになり、そうやって徐々に増えた貯蓄によ

って今ではヤギ数頭の他に牛も2頭を飼うまでになりました。

私は7年前にもこの村に行ったことがあるのですが、村の雰囲気はその時とほとんど変わっておらず（女性の髪形が少しおしゃれになった程度？）、携帯電話の電波が届くようになった程度には変わっていますが、たとえば電気はすべての世帯にあるわけでも

なく、値上がりしている灯油で灯りをとるところなどは変わりありません。急変する都市に比べて

置き去りの地方という印象があります。



ルワンダの国内外の情勢 来年2010年から、ルワンダの学校教育は英仏語の併用から英語のみに変わることとなりました。都市部では英語を話せる人が目に見えて増えてきました。町にある看板もフランス語の表記のものがほとんどでしたが、英語のものも増えてきました。フランスとの断交（09年に国交回復）、英連邦への加入、COMESA（東南部アフリカ市場共同体）への加入、IT立国の方針などが、英語熱を高めているようです。与党 RPF

中心の現政府上層部はウガンダ（英語圏）育ちということもあると思います。

ツチだフツだということは、公の場で耳にすることはありません。94年のジェノサイドは政治権力をめぐる闘争が遠因ですが、暴力行使の直接的な「口実」として、ツチ、フツといった「民族」の差異が利用されたことから、94年の新政府発足後はツチだフツだと口に出すことはデリケートな問題となりました。しかし金持ちがいそうなところは、ツチと見受けられる人が多いように見えます。現 RPF 政権はツチが中心だったため、上流階級にはツチが多いのだと考えられます。しかしある虐殺生存者の青年と会った時（彼は自身をツチだと言いました）、彼は「ツチでもウガンダ帰りの人じゃないといい仕事に就けないんだよ」と漏らしておりま



した。「ツチだから」、「フツだから」と二元論的に語ることはできません。

ジェノサイド後のルワンダを語る上で外すことができないのはやはり「ガチャチャ (Gacaca)」でしょう。ガチャチャはジェノサイド犯罪を裁くためにルワンダが独自に制度化したコミュニティ裁判で、全国で1万か所以上の村々で行われてきました。ガチャチャはほとんど終了し、有罪とされた被告人は勤労奉仕で罪を償うこととなっています。ガチャチャは過去の犯罪に裁きを下し、ジェノサイドの加担者と被害者・遺族との融和をはかるとしています。しかしジェノサイドの時期に当時は「反乱軍」であった RPF の兵士に家族を殺害された人の中には、現在は政権与党になった RPF からの「報復」を恐れて訴え出ることができない人もいます。そういう意味では「偏った正義」とも言えるかもしれませんが、通常の裁判では「200年かかる」と言われたジェノサイド犯罪に何らかの「けじめ」をつけて前に進まなければならないルワンダの現実なのかも考えます。

ルワンダは近年、経済成長率が上昇しています（05年の経済税調率は6.3%）。ジェノサイドからわずか15年しか経っていないにもかかわらず、この経済の立て直しは「奇跡」とも称され、カガメ大統領のリーダーシップへの評価の声もあります。上述の通り都市と農村の格差、都市部の貧富の格差は広がっており、政府や政策への批判も公には行えない雰囲気を感じられます。

日本とルワンダのさらなる交流へ 今回の滞在中に、日本の観光ツアーと偶然でくわしました。マウンテンゴリラのトレッキングツアーの参加者の方たちでしたが、ルワンダで日本人に（それだけでなくアジア人にも）会うことなどほとんどなかった頃からルワンダにかかわってきた私にとっては隔世の感があります。94年のジェノサイドの際に撤退した JICA は2005年に事務所を再開し、数多くの日本の青年たちが青年海外協力隊員として活動に従事しておられます。2010年にはいよいよキガリに日本大使館が開設されます。またルワンダのカーラジオから鳩山総理就任のニュースが流れていたのには驚きました（キニャルワンダ語でしたが、鳩山総理の演説が少



し聞き取れました）。東京にある駐日ルワンダ大使館には、ムニャカシ新大使が赴任されました。

この3年間で私が直接ルワンダに連れていった大学生が34人、間接的にルワンダ行きについてアドバイスさせていただいた学生、研究者、ジャーナリストといった方々の数も40人ほどになりました。その多くの人たちがその後もルワンダの人たちと交流を続けたり、研究・発表をされたり、ルワンダを紹介するテレビ番組を作ったりしていただきました。中には青年海外協力隊員として来年からルワンダに赴任することが決まった人もいます。その人たちがまた、ルワンダの現状を日本で紹介し、ルワンダへの関心やルワンダからの学びを広げていってくれるのだと思います。



世界中では様々な戦争・紛争がとどまることなく起きており、それゆえにしばらくすると何もなかったかのように忘れられてしまいます。もし「ルワンダ」という記憶を日本社会に少しはつなぎとめることができたのだとしたら、それは私にとって誇りです。15年前のジェノサイドで犠牲となった方々は、80万とも100万とも言われています。「そういう人たちがここで私たちと同じように生きていたんだよ」ということを伝えていくことも、ARC と私が続けていくべきことだと思っています。

アフリカ平和再建委員会 (Africa Reconciliation Committee: ARC-JAPAN)

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-6-1四谷サンハイツ511

Tel/Fax: 03-3351-0892 E-mail: headoffice@arc-japan.org ホームページ <http://www.arc-japan.org>

Mixiコミュニティ http://mixi.jp/view_community.pl?id=2115134



ARCではEメールでもイベント情報などを配信しています。ご希望の方は、上記アドレスまでメールをお送りください。登録いたします。